

# 山と博物館

第47巻 第1号 2002年1月25日

市立大町山岳博物館



鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁

## 鹿島槍荒沢奥壁回想

柳澤 昭夫

若い頃通いつめた荒沢奥壁を再び見たかった。自分のクライミングを問い合わせたかった。

久しぶりに、正月は鹿島槍東尾根に行くことにした。冬の登攀と共にした長年の友人がパートナーである。残念ながら山行は中止するを得ない。

池田町に生まれ育つて、山登りに魅せられた私の登山は後立山から始まつた。その頃の私が大きな影響を受けたのは、東京商大的部報「針葉樹」である。鹿島槍の北壁・荒沢奥壁の冬の初登攀は私の生まれる前、昭和の十年代である。重たく、貧弱な装備や技術で、

浪高、東京商大、東大、早大のクライマーは、北壁や荒沢奥壁の初登攀をなしとげた。この登攀を超えずして、私の登山の展開はありえない。鹿島や五龍のバリエーションルートの冬期登攀に夢中になつたのが、四十一年遅れた昭和三十年代の私の登攀である。幸い好運に恵まれ、幾つかの登攀をなしとげることができた。

荒沢奥壁の南稜フランケに自分のルートを拓くとともに、やがて、昭和四十年代に入つて、大岩壁、唐沢岳幕岩が私のクライミングの対象になる。かつては、全く不可能であつた巨大なオーバーハングを含む大岩壁に、最先端の用具を駆使して、六本のルートを拓き、おかげで冬の初登攀もなすことができた。唐沢岳幕岩に関しては誰にも負けないと自負している。アルビニズムがより困難なクライミングを課題とするなら、自分のクライミングに後悔はない。だが、今西さんや小谷部さんの登山を本当に超えただろかと自問すると、悔しいながら否と言わざるを得ない。北壁や荒沢奥壁で繰り広げられた戦前のクライミングは、今もなお登山者にアルビニズムとは何かを問い合わせている気がしてならない。

山岳博物館では、今、その頃の鹿島槍のバリエーションクライミングを掘り起こしている。未知なる困難に向う勇気は、人間の創造性の根源ではないだろうか。豊かさに恵まれて失いつつある勇気を掘り起こしたい。

(大町山岳博物館専門指導員)

# 八方尾根における注目すべき蛾類について —オリエンピックは蛾類の生息に 影響をおよぼしたか—（後編）

宮 田 渡

ヒドリバコガ

⑨ルリモンクチバ

*Lacera praeclara* Butler

暖地性の種らしいが、時には大町市扇沢の  
ような高標高地で採れることがある。（宮田、  
一九八四）。県内の採集例は少ない。

採集例 1♀ 一九九八年七月二十四日  
(定点1)

⑩ネジロフトクチバ

*Serrodes campania* (Guenée)

産出は散発的。県内の採集例は少ない。

採集例 1♂ 一九九六年八月二十二日 (定  
点1)

⑪ウスムラサキクチバ

*Ericia perlindens* (Walker)

南木曾町（三九〇m）のような低標高地か  
ら八方尾根（一六八〇m）のような高標高地  
にわたって得られるが、採集例の少ない蛾で  
ある。

採集例 1♂ 一九九六年八月二十二日 (定  
点1)

⑫フチグロシロヒメシャク

*Scopula ornata subornata* (Prout)

産地が限定されるシャクガ科の一種である。  
八方尾根における最初の記録は石神井高校生  
物部（一九六七）である。

採集例 1♂ 一九九六年七月十七日 (定  
点2)

⑬サザナミナミシヤク

*Entephria caesiata nebulosa* Inoue

高山蛾として知られるシャクガ科の一種で  
あるが、しばしば亜高山帯でも採集される。

八方尾根の亜高山帯では個体数は少ない。過  
度

去の記録には石神井高校生物部（一九六七）  
がある。

採集例 1♀ 一九九六年八月二十二日 (定  
点1)、1♂ 一九九七年七月九日 (以  
上、定点1日間採集) 一九九八年には採集で  
きなかつた。

⑭ナカクロモンシロナミシヤク

*Cosmopterix acellata* (Linnaeus)

極めて産地が限定されるシャクガ科の一種  
である。最初の記録が八方尾根である（日  
本産蛾類大図鑑、一九八二）。筆者は大町市  
扇沢一五〇〇mでライトトラップにより得て  
いる（1♂。一九七六年八月四日）。

採集例 2♀ 一九九四年七月十四日 (定点  
2) これ以後は全く採れていない。

⑮ミヤマチビナミシヤク

*Pterizoma japonicum* Inoue

本種はシャクガ科の高山蛾である。八方尾  
根における記録には、石神井高校生物部（一  
九六七）、佐々木（一九六三）、倉田・長沢  
(一九六三)などがある。

採集例 1♂ 一九九四年八月八日 (定点  
1)

⑯その他の注目種  
ミヤマウスギントガ

*Eupleridia angusta* Yosimoto

ヤガ科  
採集例 1♂ 一九九四年十月一日 (定点2)  
ムラサキキンウワバ

*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科  
採集例 1♂ 一九九六年八月二十二日 (定  
点1)

ムラサキオオアカキリバ  
*Anomis longipennis* Sugi  
ヤガ科  
採集例 1♀ 一九九四年十月一日 (定点2)

1♀ 一九九四年八月四日 (定点3)

シロジマエダシヤク  
*Erythridia longidata* (Walker)  
シヤクガ科

1♂ 一九九四年七月三十日 (定点6),  
1♂ 一九九八年八月二十一日 (定点  
2)

1♀ 一九九四年七月三十日 (定点6),  
1♂ 一九九八年八月二十一日 (定点  
2)

1♀ 一九九四年七月三十日 (定点6),  
1♂ 一九九八年八月二十一日 (定点  
2)

ヒドリバコガ  
ヤガ科

1♀ 一九九四年十月一日 (定点2)

スジクロモクメヨトウ  
*Dphytergia andrei* Kardakoff  
ヤガ科

1♀ 一九九四年七月三十日 (定点6)

キヨトガリヨトウ  
*Brychyanthia zelotypa* (Lederer)  
ヤガ科

セブトモクメヨトウ  
*Auchmis saga* (Butler)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月八日 (定点1)

セブトモクメヨトウ  
ホンバニドリヨトウ  
*Eupleridia angusta* Yosimoto  
ヤガ科

1♂ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

セブトモクメヨトウ  
ホンバニドリヨトウ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♂ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Anomis longipennis* Sugi  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキオオアカキリバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♂ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

ムラサキキンウワバ  
*Autographa harringtonae* (Staudinger)  
ヤガ科

1♀ 一九九六年八月二十二日 (定点  
1)

四、あとがき  
一九九四年から一九九八年にわたり、オリ  
ンピック会場整備事業に係る環境アセスなら  
びに環境モニタリングのための調査部門のう  
ち昆虫部門に携わった。この中から、蛾類の  
みを選び、整備事業（一九九六—一九九七  
年）が蛾類の生息に影響をあたえたかどうか  
を検証してみた。

① 調査期間中に得た蛾類は五一七種である。  
定点1年の年次別飛来種類数みると、会場整  
備事業後の蛾類の種数は減少している。この  
ことは、定点2においても同様である。すな  
わち、一三三種→二〇〇種→八三種→六  
一種の如くである。ただし、これは整備事業  
が原因だとは断定できない。

② 注目すべき五種のなかでは、アズミキ  
シタバがもっとも整備事業の影響を強く受け  
ている。アズミキシタバは一九九七年以降、  
調査地内のすべての定点で姿を消した。その  
他の注目種を含めて、多くの種が採れなくな  
つてきているが、逆に、タイワンキシタクチ  
バ・ルリモンクチバ・セブトモクメなどのよ  
うに整備事業後に新たに採集された種類もあ  
る。また、タカネキシタバ・モクメ・アルブ  
スギンウワバ・クビジロツメヨトウのように  
調査開始から整備事業終了後にわたってコン  
スタントに採集できる種類もある。クビジロ  
ツメヨトウの食草はアズミキシタバのそれと  
同じであるにもかかわらず発生が安定してい  
る理由は不明である。整備工事の影響を受け  
るか否かは、種によって異なるようである。  
(おわり)

(大町山岳博物館嘱託学芸員、農学博士)



## 長野県大町市でツマグロヒヨウモンを観察

### 清水博文

長野県大町市でツマグロヒヨウモンのメスを観察したので報告する。

このチョウは多化性（一年間に成虫が何回か発生して卵から成虫までの世代が重なり合う）の種であり、暖帯から亜熱帯・熱帯まで広く分布し、日本は分布の北限にあたる。近年長野県内でも夏から秋にかけて多くの個体が目撃されるようになってきている。

観察時の天候は晴れで、気温は摂氏二六度前後であった。このチョウは川の下流方向より飛翔ってきて数秒護岸にとまつた後、上流方向（北西方角）に移動していく。翅の損傷等は見られず新鮮な個体であった。翌日には同場所付近を探したが発見することはできなかつた。また、この付近にスミレ（在来種および園芸品種）の群生地は見当たらなかつた。

また、この一年前二〇〇〇年十月十四日に北安曇郡松川村板取の住宅地でもこのチョウのメス一個体を観察しているので併せて報告する。



写真1 ツマグロヒヨウモンのメス  
(2001.10.30 大町市高根町)

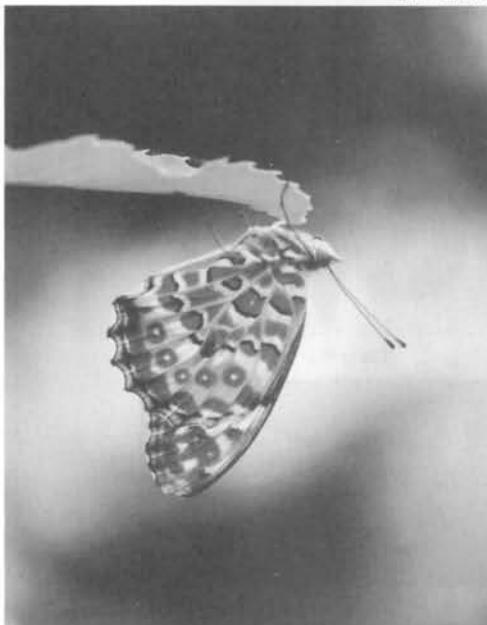


写真2 ツマグロヒヨウモンのメス  
(2000.10.14 北安曇郡松川村)

このチョウは気候の温暖化の影響や、主要な食草となっている園芸品種（ビオラ）の花壇などの植え込みや、野生化（逸脱した個体の帰化）の増加とともに分布域を拡大させているようでもある。

大町市で越冬できるのかは不明であるが、そのうちに大町市でも普通に見ることのできるチヨウとなるのかかもしれない。今後近縁在来種ともに動向に注目したい。

記録
和名 ツマグロヒヨウモン メス 一個体
学名 <i>Argynnis hyperbius</i>
（Linnaeus）
観察日 二〇〇一年十月三十日 十三時十分
観察地 長野県大町市高根町高瀬川河川敷 （左岸）

- 参考文献
- 1卷自然（蝶類）:950-951.
  - （25）三郷文化52:50-51.[郷村田下昌志・西尾規孝・丸山潔編] (1999)
  - 福田晴夫ほか共著 (1983) 原色日本蝶類生態図鑑(II) 保育社.
  - 中田信好・那須野雅好 (1995) 三郷の蝶
  - 長野県産チヨウ類動態図鑑文一総合出版.
  - 朝日新聞記事 (2001.8.24) 長野版25.
  - (市立大町山岳博物館学芸員)

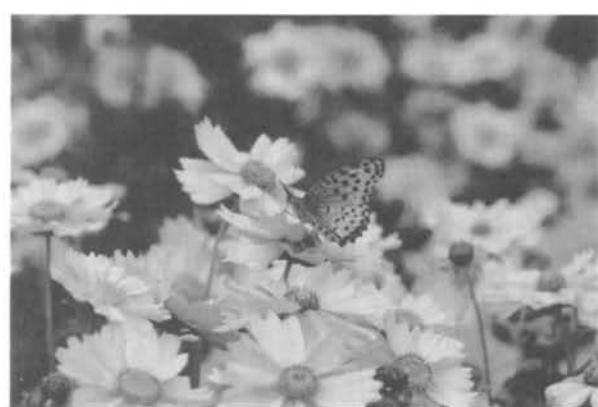


写真3 ツマグロヒヨウモンのオス  
(2001.7.1 松本市)

彩が異なり、メスは前翅の先から約二分の一が紫色をおびた黒色で、その中に斜めの白帯があるが、オスはほかのヒヨウモンチヨウの仲間と似た斑紋をしている。

このチヨウの安曇地方における記録を見ると、本種は一九五〇年九月十二日に北安曇郡白馬村飯田においてメス一個体の採集記録大町市での目撃記録がある（北安曇誌1971）。

近年では、一九九五年より南安曇郡三郷村で幼虫越冬も確認されている（中田・那須野 1995）。

また、標高の高い長野県南安曇郡安曇村上高地中ノ瀬園地の梓川沿いなどでツマグロヒヨウモンのメスやつがいが確認されている、と新聞でも報道されている（朝日新聞2001）。

このチヨウは気候の温暖化の影響や、主要な食草となっている園芸品種（ビオラ）の花壇などの植え込みや、野生化（逸脱した個体の帰化）の増加とともに分布域を拡大させているようでもある。

大町市で越冬できるのかは不明であるが、そのうちの大町市でも普通に見ることのできるチヨウとなるのかかもしれない。今後近縁在来種ともに動向に注目したい。